

第1部

『高機能自閉症・アスペルガー症候群への理解と対応』

司会者：奥野 宏二氏（あさけ学園長）、中村みゆき（あすなる学園指導室長）

シンポジスト

＜大原 喜教氏＞

四日市市立教育センター

相談支援センター（教育相談室）指導主事

●四日市市における「障害のある子どもの教育相談システム」

平成15年度から、医療・福祉・保健等の関係機関の専門家と連携しながら四日市市教育センターの相談員が中心となって「障害のある子どもの教育相談事業」を開始しました。特に軽度発達障害に関わる相談が多くの割合を占めており、小学校入学前の就学相談を含めた相談体制のあり方の見直しが必要になってきているところです。相談を受けた段階のなるべく早い時期に「学校訪問」と「面接相談」を組み合わせた形で行ない、児童一人一人の実態や課題に応じた、より具体的な指導のあり方を考えることができる点で効果を上げています。今後の特別支援教育の実施に向けては、教師の資質と専門性の向上が求められ、様々なタイプの障害の特性を理解し、今までやってきた指導のあり方を再度ふりかえてみる大切になってくると感じます。そして、当教育相談システムが学校間や地域をつなぐパイプ役としての役割機能を果たしていければと考えています。

＜松本 知子氏＞

社会福祉法人 檜の里 自閉症総合援助センターあさけ学園

障害児（者）相談支援事業コーディネーター

●地域支援の現状から高機能自閉症・アスペルガー症候群の支援を考える

三重県北勢地域で暮らす知的障害児・者の本人・家族を中心に行なっている在宅支援事業では、特に5年くらい前から高機能自閉症・多動性障害と診断された学齢期の子どもが増えました。障害の存在や情報が広く保護者や教育関係者に入ったことで、多くの支援ニーズが高まってきました。しかし、乳幼児期に多くの家族や保育関係者が子どもの行動などに不自然さを感じていても医療機関や相談機関に訪れることが少なかったり、相談や受診をしても「様子をみましょう」という程度で終わり、支援が継続されない現状もあります。そして、学齢期になって対人面での不適応が目立ち、障害の特性を把握した支援が不十分であると周囲は問題行動への対処に追われやすくなり、困り果ててから相談に見える場合も多くあります。特に学齢期の自閉症の支援については、本人達がどこで困っているのか、まず生育歴等をお聞きし、様々な生活場面に出向き・見ることで一人一人のわかりにくい障害を理解することから始まります。そして成人期に至るだけ先を見通した支援を行なっています。今後も、個々のライフサイクルに沿った継続的支援のできるネットワーク体制の確保、本人達との関係性を維持し具体的な支援が出来る専門性の構築が必要であると考えています。

＜後藤 栄一＞

三重県自閉症・発達障害支援センター事務局長

●相談を振りかえる中で高機能自閉症・アスペルガー症候群の方への支援を考える

自閉症・アスペルガー症候群という名前は一般社会の中に定着しつつありますが、まだまだ障害